

<論文>

アーヴィング・ゴフマンはなぜ化学の勉強を続けなかったのか？ —北米の反ユダヤ主義がゴフマンの人生行路と彼の社会学に与えた影響に関する一仮説—

薄井 明*

抄 録：アーヴィング・ゴフマンはセントジョンズ技術高等学校のとき理系学生であり、マニトバ大学の2年まで化学専攻であったが、3年になると突如、哲学・心理学・社会学に専攻を変えた。技術高等学校時代に「自然科学の天才」と呼ばれ、高校生で大卒程度の化学の知識をもっていたとされるゴフマンが大学で化学の勉強を続けなかったのはなぜか。筆者の答えは、この専攻変更は、当時化学の研究職がユダヤ人に対して閉ざされていたため、彼が進もうとしていた研究職の途を諦めざるを得なかった結果である、というものである。筆者は、二十世紀前半の北米における反ユダヤ主義が化学者になるゴフマンの夢を打ち砕いた、と想定する。新たな履修コースを選択した1年後、彼は大学を中退し、ウィニペグ市内の弾薬工場で働いたのち、トロントに移住してカナダ国家映画委員会に勤めた。約10年後に論文「カモをなだめることについて」を書くことによってこのときのドロップアウト経験を昇華し、主にこのときの経験を基礎として彼のリアリティ論を展開していった、と筆者は理解する。

キーワード：アーヴィング・ゴフマン、反ユダヤ主義、セントジョンズ技術高等学校、マニトバ大学、「カモをなだめることについて」

1. はじめに

アーヴィング・ゴフマンの生活誌が語られるとき、彼が「ウクライナ出身のユダヤ人移民の子」であったことがよく言及される。しかし、ゴフマンが東欧系ユダヤ人移民二世であったことが彼の構築した社会学理論とどのように関係するかという観点からの研究は、これまでほぼ皆無であった。なるほどY・ヴァンカン (Yves Winkin) は「ゴフマンの作品は自叙伝である」という挑戦的な仮説を立て、次のような問題提起をしている。

〔フロイトを〕ゴフマンと比較せずにはいられない。ユダヤ人移民の息子という彼の生活誌の中にボルタンスキーのいう「階級的ハビトゥスを構成する」経験が見出せないか。ゴフマンの作品は、フロイトの作品と同様に、社会的上昇の自叙伝ではないだろうか。答えはおそらく資料の中にある。(Winkin 1988: 16)

ところが、ヴァンカンはゴフマンの理論構築過程を「貧しい移民二世の社会的上昇」という一般的な面から考察しているものの、「東欧系ユダヤ人カナダ移民二世」が置かれた特殊な歴史的状況に関連づけて考察することはなかった。管見によれば、彼はその後の著書や論文でも、その「答え」を提出していない。

一方、ゴフマンがカナダ・マニトバ州にあるセントジョンズ技術高等学校で学び、マニトバ大学の2年まで「化学」を専攻した理系学生であったことも伝記的事実として知られている。そして、ずっと理系であった彼が入学後3年目に突如、履修コースを人文社会科学系に変更し、翌年大学を中退したことも既知の事実である。この行跡に関しては従来「ゴフマンがマニトバ大学で過ごした3年間、彼の知的関心は徐々に社会科学のほうへ移動していった」(Smith 2006: 8) との説明で皆が納得し、それ以上「問題」として追究することはなかった。

本論考はヴァンカンの問題提起を引き継ぐ試みだといえるが、彼が提示した生活誌的「解釈」の類いとは観点や手法が異なる。例えば、マニトバ大学中退後にゴフマンが働いたカナダ国家映画委員会での勤務経験がのちの著書『フレーム・アナリシス』(Goffman 1974) の遠因

* 大学教育開発センター

になったというヴァンカンの「解釈」(Winkin 1988: 20)は、もっともらしい「結びつけ」の域を出ない。

E・ゴフマンの生活誌的な背景や事情として「カナダ人であった」「理系の秀才であった」「シカゴ大学で学んだ」「米国の超上流階級に属する女性と結婚した」「妻が双極性障害に長年苦しみ、1964年に投身自殺した」ことなども重要ではあるが、彼が「東欧系ユダヤ人カナダ移民の子として第一次世界大戦後に生まれ、第二次世界大戦終結までカナダの高等学校・大学で学んだ」ことがもつ重要さは格段に違うと筆者は考える。

本論考ではまず、ゴフマンが「東欧系ユダヤ人カナダ移民二世であった」ことと「マニトバ大学で化学専攻をやめ、大学を中退した」ことが密接に関連しているという観点から、彼の生活誌上の空白であるマニトバ大学時代に関する仮説的ストーリーを提出する。それをごく簡潔に言えば、こうである。理系秀才ゴフマンがマニトバ大学の3年目に専攻を「哲学」等に変え、その翌年大学を中退していったのは、第二次大戦期にピークに達した北米の反ユダヤ主義の風潮の中で「化学者」になる彼の夢が潰えたためである。

ゴフマンが個人的な文書を一切遺さなかったため、そうした資料によってマニトバ大学時代の彼の生活誌を説明することはほぼ不可能である。そこで本論考では、関係者の証言のほか、北米の反ユダヤ主義の動向や他の東欧系ユダヤ人移民の叙述・陳述を情況証拠として、ゴフマンの大学時代の行跡を仮説的に再現していく。判断の誤りを最小限にする狙いから、時代背景を押さえたうえでゴフマン個人の状況にアプローチしていく。

また本論考では、推論によって再現された若きゴフマンの人生行路がその後彼が構築した社会学理論にどのような影響を与えたかについても、一定の仮説を提出する。それは、ユダヤ人排斥の中で彼がマニトバ大学以降に経験した下降的地位喪失が論文「カモをなだめることについて」(Goffman 1952)を書かせる原体験となり、『出会い』(Goffman 1961)等を経て『フレーム・アナリシス』に結実していく彼独自の「現実(リアリティ)」論の基盤となった、という仮説である。

2. 二十世紀前半の東欧系ユダヤ人移民二世の境遇

(1) ユダヤ人北米移民の諸段階

本論考でアーヴィング・ゴフマンの出自を単に「ユダヤ人」移民とせず「東欧系ユダヤ人」移民としているのには理由がある。第二次大戦終結以前に北米に移住してきたユダヤ人は、移住時期、先住地および特色から4グループに大別され、各グループの人々の境遇と人生に違いがみられるからである。E・ゴフマンが「第三グルー

プ」に属していることを押さえる必要がある。

第一グループ：十七世紀中頃から十九世紀初めに北米に渡ってきたユダヤ人で、「セファルディム」と呼ばれるスペイン・ポルトガル出身のユダヤ人である。その数は、植民地時代末期の1770年で総人口200万人のうち推定1,000人から2,500人程度であったとされる。彼らは、大西洋貿易に従事した富裕な商人であった。

第二グループ：1840年代から1870年代に北米に渡ってきたのが独語圏中欧出身のドイツ系ユダヤ人である。総数は約20万人とされる。彼らは「アシュケナジム」と呼ばれ、セファルディムとは民族的に異なる。北米への移民は、彼らが従事していた伝統的手工業が産業革命で没落したこと、本国において職業選択や結婚等で法的差別があったことを主な背景としていた。彼らの多くは貧しい行商人から出発したが、短期間に社会的上昇を成し遂げ、十九世紀末には全体の4分の3が実業家、ホワイトカラー、専門職に就いていた。彼らは英語を話し、改革派ユダヤ教の信奉者が増えるなど、文化的にも北米社会に同化していった。ユダヤ人でも、彼らの子弟は、クオータ・システム(後述)で差別されなかった。政治評論家 W・リップマン(Walter Lippman)はドイツ系ユダヤ移民三世、社会学者 D・リースマン(David Riesman)は移民二世である。

第三グループ：1880年代から1910年代⁽¹⁾に北米に移住したユダヤ人で、大部分が東欧系であった。この時期のユダヤ人移民数は膨大で、米国への移民は総数で200万人を超え、カナダへの移民は1900～18年で13万人を超えている。彼らの大半は、「ペイル(Pale)」と呼ばれたロシア帝国内のユダヤ人特別強制居住地区で暮らしていた。彼らが大西洋を渡って移り住んできた背景には、産業化に伴う伝統的手工業の没落や種々の法的差別に加えて、ペイル内の人口増加による経済的困窮のほか、アレクサンドル二世暗殺事件以降に激化したボグロム⁽²⁾があった。彼ら東欧系ユダヤ人は、ドイツ系ユダヤ人より貧しく、異国風の服装をし、イディッシュ語⁽³⁾を話し、正統派ユダヤ教の戒律を守って生活していた。ユダヤ色が強かった東欧系ユダヤ人の移民は、新世界の社会・文化への適応の面で不利であった。彼ら移民一世および移民二世・三世は、社会的上昇志向が強かった点でドイツ系ユダヤ人移民と同じだったが、量的・質的に「目立つ」存在になったため新たな反ユダヤ主義が発生し、その風潮は第二次大戦末まで続いた。社会的上昇の手段として高等教育を志向した東欧系ユダヤ人移民の子弟は、そのハングリー精神ゆえにユダヤ人入学制限措置を誘発し、その結果高等教育への門戸が狭められていった。その点で、こ

のグループに属する研究者は前後のグループにはない苦難を味わっている⁽⁴⁾。東欧系ユダヤ人移民二世の学者として、ゴフマンの一回り上に社会学者 R・K・マートン (Robert K. Merton) や生理学者 J・アクセルロッド (Julius Axelrod) が、同年代に社会学者の D・ベル (Daniel Bell) や H・ガーフィンケル (Harold Garfinkel)、物理学者 R・P・ファインマン (Richard P. Feynman) がいる。

第四グループ：ナチ党が政権を握った1930年代前半以降、北米に亡命してきたドイツ・中東欧のユダヤ人である。その総数は14万人弱だが、そのうち1万人超が知識人であった。人文社会科学分野では、哲学者の M・ホルクハイマー (Max Horkheimer) や T・W・アドルノ (Theodor W. Adorno)、H・マルクーゼ (Herbert Marcuse)、H・アーレント (Hannah Arendt)、社会学者の P・ラザースフェルト (Paul Lazarsfeld)、A・シュッツ (Alfred Schutz) が知られる。

(2) 二十世紀前半における北米の反ユダヤ主義の動向とアーヴィング・ゴフマンの生活誌

次に、二十世紀前半の北米の反ユダヤ主義の動向とアーヴィング・ゴフマンの生活誌を略年譜として提示する。これによって本論考の「仮説」を論証しようというのではない。いきなり細部に入り込むと個別の出来事の意味が適切に理解できなくなる危険性があるからである。(反ユダヤ主義で重要な事柄に下線を付し、関連するアーヴィングの行跡はゴシック体にした。)

- 1912年：アン・アヴァバック (Anne Averbach) が13歳のとき、家族と一緒にカナダに移住してきた。
- 1913年：マックス・ゴフマン (Max Goffman) が23歳の頃、単身でカナダに移住してきた。
- 1914年：7月、欧州で第一次世界大戦が勃発した。
- 1918年：春、マックス・ゴフマンとアン・アヴァバックが結婚した。
- 1919年：1月、マックスとアンの第一子フランセス (Frances Evelyn Goffman) が誕生した。米国のコロンビア大学で初めてクオータ・システムが非公式に導入された。以後、1920年代に米国の有名私立大学に広がっていった。
- 1920年：5月、米国で自動車王 H・フォードによる反ユダヤ・キャンペーンが始まった。7月、「ディアボーン・インディペンデント」紙で『シオン賢者の議定書』(偽書)の掲載が始まった。
- 1922年：6月、マックスとアンの第二子アーヴィング (Erving Manual Goffman) が誕生した。
- 1924年：東南欧系移民の入国阻止を狙った「新移民法」

が米国で制定された。カナダでは人道主義的観点から1920年代もユダヤ人移民を受け入れた。

- 1926年：年末、母アンと姉フランセスとアーヴィング (4歳) がマニトバ州ドーフィンに引っ越した。
- 1929年：10月、ニューヨークの株式市場で大暴落が発生し、世界恐慌の引き金になった。
- 1932年：マニトバ大学の学生委員会報告で、反ユダヤ主義が同大に蔓延していると力説された。
- 1936年：マニトバ大学メディカル・スクールでクオータ・システムが導入されたが、ユダヤ人医学生などの反対に遭い中止された。しかし、平均入学者数64人中28人いたユダヤ人が以後9人に減った。
- 1937年：ゴフマン一家はマニトバ州ウィネベグのノースエンド地区に移住し、アーヴィング (15歳) は市内のセントジョーンズ技術高等学校に入学した。
- 1938年：この年までの6年間、米国でメディカル・スクールのユダヤ人入学者数が912名から327名に激減した。
- 1939年：9月、欧州で第二次世界大戦が勃発した。アーヴィング (17歳) がウィネベグにあるマニトバ大学文理学部に入学した。
- 1940年：マニトバ大学が20歳以上の男子学生全員に軍事訓練を義務づけた。この年か次の年、アーヴィング (18歳) が家族と関係を断った。
- 1941年：アーヴィング (19歳) が専攻を「化学」から「哲学」「心理学」「社会学」に変更した。
- 1942年：アーヴィング (20歳) がマニトバ大学を中退した。その後ウィネベグ市内の弾薬工場で働いた。
- 1943年：アーヴィング (21歳) がトロントに移住し、カナダ国家映画委員会 (NFB) で勤務した。
- 1944年：夏、アーヴィング (22歳) が NFB で D・ロング (Dennis Wrong) と出会い、「社会学」への方向転換を勧められた。秋、トロント大学ユニヴァーシティ・カレッジ政治経済学部に入学した。
- 1945年：秋、アーヴィング (23歳) が米国のシカゴ大学社会学科修士課程に入学した。
- 1940年代末：この頃から、メディカル・スクールを含め米国内の高等教育機関全般においてクオータ・システムが衰退していった。
- 1948年：「ニューヨーク州公正教育実施法」が制定され、人種・宗教を理由にした高等教育機関での入学者排斥は公式に禁止された。
- 1949年：10月、アーヴィング (27歳) がエディンバラ大学社会人類学科の助手となった。12月、修士論文をシカゴ大学に提出した。同月、アンスト島でのフィールドワークに着手した。
- 1952年：6月、アーヴィング (30歳) がプロテスタントのアンジェリカと結婚した。11月、論文「カモをな

だめることについて：不首尾に対する適応の諸相」
(Goffman 1952) が『精神医学』に掲載された。

細かな検討は後段で行うが、この略年譜から、E・ゴフマンの青年期までの人生行路が北米の反ユダヤ主義の深刻化の真ただ中で展開したことが確認できる。

(3) 北米における反ユダヤ主義の実態と「東欧系ユダヤ人カナダ移民二世」ゴフマンのモラル・キャリア

二十世紀の北米における反ユダヤ主義の消長についていえば、1920年代以降に徐々に強まっていき、30年代に本格化、30年代末から40年代前半をピークとして、その後急速に減退していったというのが全体的な流れである。またカナダと米国を比較した場合、反ユダヤ主義は米国がカナダに先行し、米国の動向が少し遅れてカナダに波及していったというのが実態である。

一口に「反ユダヤ主義 (anti-Semitism)」といっても、この語が意味するものは多岐にわたる。反ユダヤ主義には、①「物理的な暴力行使」、②「社会・経済的な排斥」、③「イデオロギー的反ユダヤ・キャンペーン」、④「宗教的反ユダヤ主義」の形態があるという (佐藤 2000 : 18)。①物理的な暴力行使に関しては、欧州ほどではなかったが、二十世紀前半の北米でも発生した。③イデオロギー的反ユダヤ・キャンペーンの中では、自動車王 H・フォード (Henry Ford) が主導して1920年から展開したキャンペーンが悪名高い。1927年に公式撤回されたものの、このキャンペーンが人々の意識に及ぼした影響は大きかった。一般に「プロトコル」と呼ばれる偽書『シオン賢者の議定書』を真実であるかのように喧伝した結果、「ユダヤ人の陰謀による世界支配計画」という説を信じる人が今も存在している。④宗教的反ユダヤ主義は、キリスト教徒の心の奥底に潜む中世以来のユダヤ人への反感である。子供たちの間で発生したユダヤ人に対する「いじめ」などにこの心情が働いていた。そして、二十世紀前半の北米で最も力を発揮した反ユダヤ主義が②社会・経済的な排斥すなわち「就学や就職、昇進の際などに加えられる排斥や差別」(佐藤 同上) であった。そのうち、本論考で重要なのが大学入学選抜で行われた「クオータ・システム」⁽⁵⁾である。

クオータ・システムは1919年にコロンビア大学で非公式に導入されて以降、北東部の名門私立大学を中心に広がっていった。このユダヤ人入学制限措置が導入された背景について研究者はこう説明する。

当時、名門私立大学の学生の行動様式を支配していたのは「上品ぶった社交の礼儀作法」であり、彼らのなかでは学業成績よりも、スポーツマンシップやリー

ダーシップに優れているかといった基準によって個々の学生のランクが評価されていた。(……) こうした状況のなか、1920年代以後、学園に急速に進出しはじめたユダヤ人学生集団が示した、その勉学への傾倒ばかりと教育を手段に社会的上昇をめざす生き方は、ネイティブ白人プロテスタント系学生集団の側に、強い排斥感情を抱かせる要因になった。(佐藤 2000 : 155)

クオータ・システムは1920年代に米国北東部の大学から中西部・南部の大学に広がったのち、30年代に国境を越えてカナダに及んだ。後年ゴフマンが入学するマニトバ大学ではメディカル・スクールで30年代半ばに導入された (佐藤 2000 : 172 ; Tulchinsky 2008 : 318)。医学系で始まったユダヤ人入学制限措置は「歯学系」「薬学系」「法学系」でも行われていった。米国のプロフェッショナル・スクールの新入生全体に占めるユダヤ人比率(1935年度→1946年度)は、歯学系:28.2%→18.9%、薬学系:24.5%→15.1%、法学系:25.8%→11.1%と、軒並み激減した (佐藤 2000 : 166)。

こうしたユダヤ人排斥とともに、彼らに対する差別意識も強くなった。米国で戦前・戦後両方で実施された調査によると、「大学はユダヤ人の入学者数を制限すべきか」という問いに「はい」と答えた米国人の割合は、1962年の「4%」に対して、1938年では「26%」と高率だった (Stember *et al.* 1966 : 104)。また、「もしあなたが新人を雇う雇用者だったとして、その新人がユダヤ人だったとしたら、それは大変なことですか」という問いに「はい」と答えた米国人の割合は、1962年で「6%」と低いのに比して、第二次大戦期では1940年「43%」、42年「37%」、45年「42%」と相当高かった (*ibid.* : 92)。これらを総合すると、ユダヤ人に対する排斥と差別意識が特に強かったのは1930年代末から40年代半ばにかけての時期だったようである。

以上が二十世紀前半の北米、特に米国の「反ユダヤ主義」の動向だけでも、それがそのまま E・ゴフマンの「ユダヤ人としての被差別体験」の変遷であったわけではない。同じ東欧系ユダヤ人移民でも、米国とカナダとでは社会的な位置づけは少し異なっていた⁽⁶⁾。またカナダ国内でも、田舎と都会とでは、反ユダヤ主義の意識やユダヤ人排斥の動きに差があった。加えて、時期による反ユダヤ主義の強弱、個人のライフステージによる反ユダヤ主義の受けとめ方や影響の違いなどがある。

アーヴィング・ゴフマンが生まれたのはカナダ・アルバータ州マンヴィル (Mannville) であるが、彼が4歳の1926年暮れにマニトバ州ドーフィン (Dauphin) に一家で移住して以来、1937年までの10年余りをドーフィンで過ごした。人口約4,000人のこの町に住んでいたユダ

ヤ人は戦前のピーク時で15～20家族、常設のシナゴーグはなかった。1920年代から30年代半ばという時期は反ユダヤ主義が激化する前で、田舎町ドーフィンではユダヤ人が数的に「目立つ」存在でなかったため、彼らに対する露骨な排斥や差別はなかったと思われる。子供たちの間では、ユダヤ人排斥の動きがある一方、ユダヤ人と非ユダヤ人の交流もあった。アーヴィングの姉フランセス・E・ベイ（Frances E. Bay, née Goffman）は、ドーフィン時代の両者の関係についてこう述懐している。

シャーリン：（……）あなたは町に多少の反ユダヤ主義が存在したと言いました。

ベイ：そのとおり。私はそれに気づきませんでした。あるいは、気づいていたのかもしれませんが。それは、私と一緒に遊ぶ〔非ユダヤ人の〕子供もいたし、一緒に遊ばない〔非ユダヤ人の〕子供もいたからです。（……）若い頃、6人の女子がいました。私たちは町の有力集団でした。（……）私たちのうち2人はユダヤ人で、他はユダヤ人ではありませんでした。私たちはテニスを一緒にしました。（……）そのうち1人が反ユダヤ主義者だったと思います。（Bay 2009）

1937年、ゴフマン一家はマニトバ州の州都ウィニペグ（Winnipeg）に移住してきたが、ユダヤ人を取り巻く環境はドーフィンとは違っていた。当時ウィニペグの人口は約22万人で、ノースエンド地区に1万5千人前後のユダヤ人が集住していた。また、ゴフマン一家が移住してきた時期は、ユダヤ人排斥がピークに向かう時期に差しかかっていた。アヴァバック家の親族会アルバム⁽⁷⁾に当時のノースエンド地区内外の様子が記されている。

昔東欧にあったペイルのゲットーに閉じ込められていたときは異なり、ここでは住民が自ら選んで隔離生活をしていた。（……）ノースエンドの壁は心理的なものだったが、外部に敵意が存在しているのは知っていた。教育におけるクォータ、就職の際の障壁、「ユダヤ人お断り」という人種差別的な看板。これらは1930年代はもちろん、1940年代初頭までみられた。

また、1932年生まれで幼少期をノースエンド地区で過ごしたあるユダヤ人移民三世は、小学校時代にウクライナ人移民の子供たちから彼が受けた「いじめ」について次のように描写している。フランセスやアーヴィングが幼少期を過ごした時期のドーフィンとは、子供たちの間での反ユダヤ主義の様相はひどく異なっていた。

ウィニペグのユダヤ人は、金持ちも貧乏人も皆ノー

スエンド地区に強制的に住まわされたというのが事実だが、キリスト教徒のウクライナ人が数的に圧倒していた。彼らは移住とともに東欧から反ユダヤ主義を持ち込んだ。ユダヤ人もキリスト教徒ウクライナ人も同じ小学校に通っていた。チャンブレイン小学校は私の家から1ブロックの距離だったが、数マイルの距離に感じた。友人と私は、近所のウクライナ人の子供たちによる襲撃を避けるため学校まで遠回りし、毎回違う道を通るようになった。彼らにルートが知られていたので、混乱させるため私たちは新たな道をつねに考え出していった。（Syme 2011：47）

だが、E・ゴフマンがウィニペグに引っ越してきたときすでに15歳であり、間を置かずセントジョンズ技術高等学校に入学したので、この種の「いじめ」を経験することはなかったはずである。しかも同校は、左翼的思想の持ち主だった校長G・リーヴ（George Reeve）が移民の子弟にも門戸を開いた結果、1929年までに生徒の半数以上がユダヤ人となっていた。外部世界では反ユダヤ主義が強まっていた1930年代後半においても、この技術高等学校の内部にいるかぎり、そうした風潮の影響を受けない世界が存在していたと思われる。

ウィニペグは1919年にゼネラル・ストライキが行われた土地柄でユダヤ人による労働運動が盛んであった。そのため技術高等学校にも政治に熱心な生徒が多数いたが、E・ゴフマンは政治には無関心だった。自宅に友人を呼ばず、独りでいることを好み、リヒャルト・ワーグナー（W. Richard Wagner）の楽曲を好んで聴いていた（Winkin 2010：57）。「とても冒険好きで、大胆不敵で、好奇心旺盛」（Bay 2009）という幼少期からの性格を保持しつつ、自宅では「化学」実験に熱中し、学校では理科系科目で成績が飛び抜けた生徒であった。母方の従妹E・ベスブリス（Esther Besbris）は「セントジョンズ技術高等学校においてアーヴィングは数学の天才として知られ、また科学においても有名だった」（Besbris 2010）と述懐している。同様の回想は複数残されている。

化学で彼〔アーヴィング―引用者〕に競争相手はいなかった。「私たちは、彼が自然科学の天才だと考えていた」とブライアン・パークは回想する。それは、自宅の地下室に彼専用の実験室をもっていたからである。（……）彼の母親の従兄がマニトバ大学の教授だった。その教授はアーヴィングの実験に興味を抱き、マニトバ大学化学科の同僚2人を呼んで、この分野のアーヴィングの知識を精査してもらった。すると、彼の化学の知識は大学3年生に匹敵することがわかった。（Winkin 2010：58）

ウィニペグ市内では反ユダヤ主義の風潮が強まり、またユダヤ人の政治運動も激しさを増していく中で、そうした(現実)から距離を取って勉学と音楽の世界に浸り、自然科学の分野では「天才」扱いされていた E・ゴフマンにとって、セントジョンズ技術高等学校時代は必ずしも「暗い」時期ではなかったと思われる。

3. マニトバ大学でのゴフマンの挫折

(1) 理系秀才ゴフマンが「化学」専攻をやめた理由

欧州で第二次世界大戦が勃発した1939年9月、17歳のゴフマンはウィニペグ市内にあるマニトバ大学文理学部に入学した。「化学」の成績がずば抜け、技術高等学校時代「自然科学の天才」「数学の天才」と渾名された理系秀才ゴフマンは、入学後「化学」を中心に学修していった。しかし、順調にみえたのは最初の2年間で、結局マニトバ大学時代は彼にとって「挫折」の時期となった。3年目を迎えた彼は、推奨された「化学」コースを履修せず、全く違うコースを選択した。さらにその1年後、彼は学業をやめ退学してしまったのである。

まず、マニトバ大学でのゴフマンの履修状況を確認しておこう。G・スミス (Smith 1989: 106) と D・アルバス (Albas 2012) からの情報をまとめると、マニトバ大学での彼の学修状況は次のようになる。

マニトバ大学の1年目、ゴフマンは「数学」「物理」「化学」のコースを履修したほか、「政治経済学」「英語」のコースも取った。政治経済学や英語の履修は、理系学生にも人文社会系科目を履修させるリベラル・アーツ的カリキュラムによると考えられる。2年目、彼はより専門的な「化学」のコースを取った。しかし、3年目の1941年度、彼は後続の、より高度な「化学」のコースを履修せず、「哲学」「心理学」「社会学」にコースを変更した。

なぜ彼はマニトバ大学の3年目で「化学」専攻という自然な行路を進んでいかなかったのだろうか。いくつかの可能性が考えられる。順次検討していこう。

a) ごく一般的に言えば、学業についていけなかった可能性も推定はできる。だが、技術高等学校時代にすでに大学3年生レベルの化学の知識を習得していたとされるゴフマンにその可能性はまず考えられない。

b) このコース変更は彼の学問的な興味の変化によるという可能性はどうか。従来、この学修上の方向転換に関しては「ゴフマンがマニトバ大学で過ごした3年間、彼の知的な関心は徐々に社会科学のほうへ移動していった」(Smith 2006: 8) といった説明がなされてきた。

将来「社会学」者になる「運命」がゴフマンにあり、彼がそれに沿って「社会科学」そして「社会学」のほうに学問的な舵を切ったというのである。

このストーリーはもっともらしいけれども、よく考えると疑わしい。というのは、彼が大学の3年目に主として勉強したのは「社会科学」ではなく「哲学」だったからである⁽⁸⁾。しかも、この時期彼が読み込んでいたのは『科学と近代世界』や『過程と実在』などの A・N・ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead) の著作であった。これらは「科学哲学」「自然哲学」に属するから、「社会科学」へのシフトというのは的外れである。ゴフマンが「社会学」者になっていく「運命」を事後的に想定してしまうこの錯誤は、結婚相手との間に「運命の赤い糸」が前から存在していたと考える錯誤と同類である。

c) それでは、「哲学」のほうに彼の関心が移った結果、「化学」専攻の継続をやめたという可能性はどうか。もちろん、他の学問分野に興味が湧くことはあり得るから、そうした興味の変化が確かめられれば、彼の転向に関心の移動から説明することはできる。しかし、その可能性も低い。なぜなら、(ホワイトヘッド哲学以外の) 大学で勉強した「哲学」をゴフマンは面白いと思っていたという証言が残されているからである。

私 [D・ロングー引用者] がゴフマンと NFB で会ったとき、彼は私に「本当のところマニトバ大学に戻って、専攻した哲学を勉強したいと思わない」と語った。「哲学は専門化しすぎていて趣味に合わない」と彼が言ったので、「社会学をやってみたら」と私は言った。(Wrong 2011) [傍点は引用者]

d) 残された可能性は、ゴフマンの専攻変更が「反ユダヤ主義」の激化の中で彼が当初抱いていた志望を断念した結果だという解釈⁽⁹⁾である。二十世紀前半の北米社会の動向を考慮した場合、この解釈の蓋然性が最も高い。彼がマニトバ大学に在籍した1939~42年は、北米で反ユダヤ主義が「最高潮」(Dinnerstein 1994: 128-149) に達した1939~45年と重なっている。それだけでなく、ゴフマンの身边でも反ユダヤ主義の深刻化を示す事実が数多く見出される。米国で広まったクオータ・システムがマニトバ大学に及ぶなど反ユダヤ主義の風潮は30年代以降学内に蔓延していた。この事態を『マニトバ大学史』は率直に認めている。

1932年の学生委員会の報告は、人種差別、特に反ユダヤ主義がマニトバ大学に蔓延していることを力説している。同報告は (……) 多数派を占めるアングロ・サクソン系学生側の反感や恩着せがましい態度を是正

させるよう大学に要求している。第二次大戦末まで公式に認めなかったが、メディカル・スクールでユダヤ人に対するクオータが存在した。ユダヤ人が工学部に入るのは難しいとの評判であった。ロー・スクールへの入学は認められたが、卒業後はユダヤ人法律事務所の実務修習生として働くことが期待された。大学の教授陣にユダヤ人の教員は1人もいなかった。(……) 男子学生や女子学生の社交クラブはユダヤ人を完全に排除していた。(Bumsted 2001 : 87-88)

そして、北米のアカデミアにおけるユダヤ人排斥の風潮は、医学・歯学・薬学・工学だけでなく、「化学」の分野にも存在していた。ゴフマンがマニトバ大学で化学を勉強していた時期、米国の化学の分野においてユダヤ人学生が排斥されていたという証言がある。

『『バーク』だとか『スタイン』で終わる名前は、化学の奨学生選抜会議で素通りされてしまうことを、われわれは百も承知しています」と、ハーバード大学化学部の主任教授アルバート・スプレイグ・クーリッジは、1946年、マサチューセッツの立法委員会で述べている。ユダヤ人を受け入れてもむだである、なぜなら化学産業は長いことユダヤ人には門戸を閉ざしていたので、ユダヤ人化学者には仕事口がなかったからだ、と、クーリッジは説明している。／「非ユダヤ人青年は多数の化学会社から引っ張りだこでしたが、私にはまるで仕事がありませんでした」。ノーベル賞受賞者のインドア・I・ラビは、四半世紀前にコーネル大学を卒業した時の経験を回想して語っている。(Silberman 1985 = 1988 : 121) [傍点は引用者]

以上の情況証拠とゴフマンの専攻変更を突き合わせると、次のようなストーリーを描くことができる。

中学校以来自宅で「化学」実験に熱中し、セントジョーンズ技術高等学校では「化学」でずば抜けていたゴフマンは、将来「化学の研究者」になる夢を抱いてマニトバ大学に入学し、「化学」を専攻した。しかし、外部世界には、彼が思い描いていた「甘い」《現実》⁽¹⁰⁾とは全く異なる「不条理で過酷な」《現実》が存在していた。幸か不幸かセントジョーンズ技術高等学校では生徒の過半数がユダヤ人という特殊な環境だったため気づきにくかったが、北米の大学・研究所・企業ではユダヤ人排斥が横行していた。せっかく大学に入ったのに、ユダヤ人である自分には卒業後「化学」の専門職に就く途は閉ざされている。大学2年目のある時期、ゴフマンはこの《現実》を思い知った。このとき

彼は、自分が極端に差別された存在だと身をもって知る「スティグマの学習」(Goffman 1963 : 45)を経験することになる。化学の勉強を続けても身を立てられないと悟った彼は、化学の勉強をやめ、「哲学」など人文社会系のコースに履修変更した。

このストーリーを裏付ける直接証拠を現在のところ筆者は見出せていない。ただ、ゴフマンの著書『スティグマ』には「脳性麻痺患者」に仮託して自らの経験を述べているとも読める⁽¹¹⁾体験談が引用されている。

「[脳性麻痺という]障害はあるものの、私が家族生活の保護監督下にあたり、大学のスケジュールの中にあたり、成人市民としての権利を行使せず生活している限り、社会の風当たりは優しく穏やかだった。しかし、大学を卒業し、ビジネス・スクールを修了し、地域計画のボランティア・ワーカーとして活動の幅を広げていくと、ビジネス界の中世的な偏見と迷信に行く手を阻まれることが頻繁になった。職探しは射撃部隊の前に立つようなものだった。(……)」(Goffman 1963 : 34) [傍点は引用者]

また、こうしたストーリーの想定は、彼の最初期の論文「カモをなだめることについて」(Goffman 1952) [以下、「カモ」論文] 執筆の問題に光明を投じる。「カモ」論文の主題は「突然の下降的地位喪失」であるが、なぜ彼がこの主題を選んだのかこれまで不明であった。しかし、マニトバ大学時代にゴフマンが「突然の下降的地位喪失」を経験したと想定すれば、この論文執筆の有力な動機になり得る。すなわち、自らの不本意な「ドロップアウト」経験を「カモ」論文において「信用詐欺」の被害経験になぞらえて客観化・一般化して考察したと解釈すると、彼がこの論文を執筆した理由が理解できるようになるのである。「カモ」論文にはこう記されている。

詐欺犯罪に遭った場合、被害者はそれまで自明視していた安全と地位の源泉が失われたことに突然適応しなければならなくなる。喪失に対するこうした適応過程を考察することは、私たちの社会におけるのめり込みとのめり込んだ自己の関係を理解することにつながる。(Goffman 1952 : 451) [傍点は引用者]

引用文中の「被害者」をアーヴィング・ゴフマンに置き換えれば、傍点を付した箇所が、筆者の推断するマニトバ大学でのゴフマンの「挫折」体験を指しているという解釈には、一定の蓋然性があると思う。

確かに、「ゴフマンが大学3年目に化学の専攻をやめ

た」という事実と北米の反ユダヤ主義をめぐる状況証拠を突き合わせていけば、先述した「マニトバ大学におけるゴフマンの挫折」のストーリーに自然に行き着く。しかし、このストーリーの傍証として文献による「……とも読める」式の推論を重ねても、それだけでは「可能性の一つ」を付け足すことにしかならない。彼の専攻変更に関する情報が上記以外にない中で、先述のストーリーの真実性を証明していくには、専攻変更後のゴフマンの行跡を参照しながら、より包括的な観点から考察していくべきだろう。

（２）下降的地位喪失としての大学退学とその後

ゴフマンが上記のようなユダヤ人排斥の（現実）に直面したと想定して、彼はその（現実）にどのように適応したと考えられるか。一つは、「ユダヤ人」というステイグマをもつ自分が生きていける「化学」以外の学問分野があるかという問いであったろう。このとき彼が選んだのは「哲学」をはじめとする人文社会系の分野であった。しかし、ほどなくこの分野においても研究者になる途はないとわかったのではないか。その帰結が１年後のマニトバ大学退学だったと推測される⁽¹²⁾。

もう一つは、「ユダヤ教」との関係である。ゴフマンは、高等学校時代、ユダヤ教に距離を取り、ユダヤ人生徒が通っていた「放課後のユダヤ人学級」にも参加していなかったが（Winkin 2010:57）、マニトバ大学での「挫折」で「自分がユダヤ人に生まれたこと」をさらに憎んだ可能性がある⁽¹³⁾。そう考えると、この頃（ユダヤ教徒である）「家族との関係を絶った」彼の行動は、ユダヤ人という出自を否認する振る舞いと理解できる。正確な前後関係は不詳だが、家族との絶縁の時期は専攻変更の時期と重なる。この点に関して、彼の息子トム（Tom Goffman）による情報が伝えられている。

〔アーヴィングが〕18歳のとき〔1940年6月～41年6月―引用者〕家族との関係を絶った。彼の家では多くのユダヤ教の儀礼が行われていた。彼はユダヤ教の儀式が大嫌いだった。（トム・ゴフマンからシャーリン宛の手紙、2008年1月8日）（Shalin 2014：13）

学術・研究分野で身を立てることが不可能だと悟り、家族と縁を切ったゴフマンが、生きる別の途を探しただろうことは、容易に想像できる。事実、マニトバ大学を1942年に中退した彼は、ウィニペグ市トランスコーナにある弾薬工場で働いたのち（Albas 2012）、1943年トロントに移り住み、「カナダ国家映画委員会（NFB）」に勤務した。NFB 就職という選択は、徴兵だけは避けたいという彼の思惑の結果でもある⁽¹⁴⁾。NFB で一緒になり、

彼に社会学の途を勧めた D・ロング（Dennis Wrong）は、この辺の事情を次のように説明している。

彼〔ゴフマン―引用者〕が NFB に入った唯一の理由は、徴兵されなかったということである。NFB に入らなければ、入隊しなければならなかった。彼は自分がユダヤ人で背も低いので軍隊に入ればいじめの標的になると考えていた。彼は全く正当にもそう考えて、政府の仕事に就いたのである。（Wrong 2011）

そして、このときゴフマンは「映画で身を立てていこうと本気で考えていた」（Burns 1992：9）ようである。ユダヤ人が映画業界で活躍していたことが進路選択に影響した可能性もある。いずれにせよ、大学を中退したゴフマンは、生きるために映画業界に身を投じていった。

マニトバ大学での専攻変更に端を発し、大学中退、弾薬工場勤務を経て、NFB 勤務に至る過程を全体として見てみると、それはゴフマンの「ドロップアウト」過程だったと判断せざるを得ない。彼の「専攻変更」を単独で考察した場合、筆者が推断するストーリー以外の可能性も完全には排除できないけれども、その後の「大学中退」と「弾薬工場勤務」を一連のものとして捉えたと、大学での専攻変更は「非自発的な下降的地位喪失」過程の端緒だったと見なすべきである。さらに、戦争の拡大と激化、反ユダヤ主義の深刻化という時代状況の推移を重ね合わせてみると、このときのゴフマンは夢破れて落伍していったと考えてはば間違いない。

（３）ゴフマンの地位喪失体験と「カモ」論文の関係

さて、以上のような出来事がゴフマンの身の上に起こったと推断し、それに対して彼が上記のように対応したと推断すると、ゴフマン社会学の理解がどのように深まるのか。端的に言えば、こうした推断によって、彼の著作に対して新たな理解の途が開ける。直接関係する著作として「カモ」論文と『ステイグマ』が想起されるが、ここでは「カモ」論文について考察する。

「カモ」論文は、最初の公刊論文「階級ステイタスのシンボル」（Goffman 1951）〔以下、「階級」論文〕と同様、フィールドワークや調査に基づかない論文である。筆者はかつて「階級」論文が研究上および私生活上「社会階級」論に引きつける「磁場」の中で執筆されたという仮説を提出したが（薄井 2012）、「階級」論文の場合、「作品」と「生活誌」の関係は比較的に見出しやすかった。それに対して「カモ」論文では、ゴフマンの生活誌との関係が不明であった。それは、おそらく作品と生活誌の関係が単純でないことに起因する。両者の関係は、彼が文字通りの「信用詐欺」被害に遭ったとか、彼の身邊に「信

用詐欺師」がいたといった次元にはない。筆者は「カモ」論文をかつて次のように特徴づけた。

タイトルにある「カモ(the mark)」は、信用詐欺における標的＝被害者を指す俗語である。信用詐欺に引っかけたカモはその“うまい”話を信じ込み、自分は「成功者」になれると思ひ込んで意気揚々とするが、仕組まれた通りに結局“うまい”話は崩れ去り、「失敗者」の地位に突き落とされる。ゴフマンは、信用詐欺で突然自分の安全や地位が失われた状況に対する適応過程を考察することが「私たちの社会におけるのめり込みとへのめり込んでいる自己との関係を理解すること」(Goffman 1952b: 451)につながるとして、本論文を展開している。(……)ゴフマンは、この過程が地位や自己像が急変する状況一般に組み込まれていると考え、索出的メタファーとして拡張的に適用しようとした。(薄井 2016: 4) [傍点は引用者]

このように、「信用詐欺」は「突然の下降的地位喪失」の構造を浮かび上がらせる索出的メタファーであった。でも、なぜゴフマンは二番目の公刊論文で「突然の下降的地位喪失」というテーマを選んだのだろうか。

「カモ」論文(1952年公刊)を執筆していたときゴフマンは、シカゴ大学の博士課程に進んでいて、エディンバラ大学社会人類学科の助手をしながら、博士号取得のためのフィールドワークをアンスト島で行っていた。当時の彼の身边に「突然の下降的地位喪失」と呼べる事象は確認できない。それに該当する出来事があったとすれば、筆者が推断するようなマニトバ大学時代のゴフマンの専攻変更と大学中退においてほかに考えられない。高等学校以来の「将来の見通し」が結局「自惚れた思い違い」であったと思い知ったマニトバ大学でのゴフマンの「挫折」体験。その体験を客観視できるぐらいの歳月が経ち、一定の見識が備わったとき、彼は自らの体験を、あたかも「信用詐欺」の長期の「騙し」に遭っていたかのような体験として理解することで、対象化し一般化して昇華しようとしたのではないか。

Y・ヴァンカンが主張した「ゴフマンの作品は自叙伝である」という命題は、こうした意味で理解するなら、誤りではないと思う。ただし、すでに指摘したように、ゴフマンにおける作品と生活誌との関係は単純ではない。彼が「自分の足跡を消し去る達人であった」(Collins 1986: 109)とすれば、彼が自らの経験をそのままの形で作品の中で描写しているはずはない。加工を施したり、複数の箇所がちりばめたり、いくつかの挿話を一つに圧縮したり、ある挿話を別の挿話に置き換えたりといった形で叙述していると想定すべきであろう。

筆者は「カモ」論文が依拠している資料・データに関して以前こう書いた。

「カモ」論文は、主に言語学者のD・W・モローの著書『大がかりな信用詐欺』の考察から「カモを宥める」という社会過程を抽出してそれを一般化し、社会学的著作の知見、ゴフマン自らの経験や見聞と思われるエピソード、および学友との会話から得た示唆を資料・ヒントにして、あとは論理的構成力により叙述された論文である。(薄井 2016: 2) [傍点は引用者]

確かに、「カモ」論文には、ゴフマン自身の経験や彼が見聞きした事柄と目される記述が少なからず組み込まれている。例えば、トロント大学からシカゴ大学初期までの恋人エリザベス・ボット(Elizabeth Bott)との関係⁽¹⁵⁾やシカゴ大学で知り合って妻になるアンジェリカ・S・チョート(Angelica S. Choate)との関係を指していると判断できる記述が複数あり、また、先述したクオータ・システムによって差別されたユダヤ人学生の実話と見なせる記述も散見される。

しかし、それらは一見それとわからないような形で描写されている。例えば「米国では、自分たちの社交界で結婚し損なった上流階級の女性は、上層中産階級の専門職の男性と結婚するという認められたルートに従うかもしれない」(Goffman 1952: 463)という箇所はほぼ間違いなくアンジェリカとゴフマンの結婚を指しているが、米国における結婚の一般的傾向のように書かれている。また、クオータ・システムにより医師への途を断念させられたユダヤ人学生の境遇を想起して書いたと考えられる「医学の勉強をしている人が歯学の勉強に転換するよう要請されるかもしれない」(ibid.: 457)や「内科医になりそこなって歯科医になった人」(ibid.: 463)という記述が、前者は下降的地位喪失者を「なだめる」方法の例として、後者は「上から降りてきた者と下から昇ってきた者とが会合う場」における「上から降りてきた者」の例として、別の箇所に配置されている。

このように、ゴフマンの生活誌と作品の間には、一筋縄ではいかないけれども、一定の反映関係が存在していると想定すると、彼の著作に対して、従来にない読み方が可能になる。「カモ」論文でいえば、マニトバ大学での「ドロップアウト」体験が論文の主題である「突然の下降的地位喪失」の原体験＝原型となり、約10年の年月が経過した時点でこの体験を「信用詐欺」の被害体験に擬して構造を解明し、主題に関連する種々の体験や見聞を一般化しつつ組み込んでいったと理解すると、逆に、ゴフマンの「作品」に彼の「生活誌」上の体験を読み取る途が開けてくる⁽¹⁶⁾。こうした視点から見ると、例

えば次の記述は、大学2年目に「ユダヤ人は化学の研究者にはなれない」という〈現実〉を突きつけられたときの彼の心境と見なすことが可能である。

自分自身を抜け目のない男だと定義していた彼は自分が単にもう一人のカモ [= 失敗者—引用者] でしかなかったという事実を直視しなければならない。自分自身に一定の特質が備わっていると定義していた彼は、惨めにも自分にはそれが備わっていなかったということを自分自身に証明することになる。(Goffman 1952: 452) [傍点は引用者]

また、次の引用中の「見当違いの期待」と「妥当な期待」という表現には、当時あったユダヤ人排斥の〈現実〉を彼が認識していなかった増上慢の態度に対する反省（前者）と、それでもやはりその〈現実〉が不条理だという憤り（後者）が読み取れる。

カモという用語は、事実を意図的に不実表示した詐欺師によって束の間の期待を与えられた人に適用されるのが一般的だけれども、より大きな社会的場面を分析するにはもっと緩やか定義のほうが望ましい。長い時間維持できたり、詐欺師が誠実に行動したりしたとしても、結局期待は誤りだったと判明するかもしれない。したがってまた、見当違いの期待だけでなく、妥当な期待が裏切られたときにも、なだめが必要になってくる。(Goffman 1952: 453) [傍点は引用者]

そして、「妥当な期待が裏切られたときにも」という表現には、私たちが「紛れもない現実」と信じているものと信用詐欺でカモが信じ込む《現実》とが連続的な事象だと見るゴフマンの醒めた見方が垣間見られる。

これまで理論的な位置づけが不明で、彼の生活誌と関連づけられることもなかった「カモ」論文は、マニトバ大学時代に彼が経験した「突然の下降的地位喪失」を理論化したものだと思えると、いくつもの疑問が解ける。しかも、この論文は、E・ゴフマンが適当に書いたものではなく⁽¹⁷⁾、論文に対する周囲の評価も高かった⁽¹⁸⁾。大学院の同僚S・メンドロヴィッツ (Saul Mendlovitz) は「カモ」論文について次のように評している⁽¹⁹⁾。

彼 [ゴフマン—引用者] は論文を書いていて、それについて私は少しばかり内容を知っていたのだが、その論文が彼の有名な「カモをなだめること」であった。(Mendlovitz 2009) [傍点は引用者]

「カモ」論文が一定の注目を集め、ゴフマン自身もこ

の論文を重要視していたとすれば、この論文およびその原体験になったと推断されるマニトバ大学での彼の体験は、彼の理論構築過程においてこれまで考えられていた以上に重要さと意義をもっていると理解すべきであろう。この点に関して、ドロップアウト後の彼の生活誌と関連づけて、さらに検討してみよう。

(4) 〈現実〉の暫定性と脆弱性というユダヤ人ゴフマンの存在論的感覚

米国におけるその後の反ユダヤ主義についていうと、第二次世界大戦期にピークに達したのち、大戦終結後、急速に退潮していった。差別意識はある程度潜在した可能性はあるものの、公然または隠然としたユダヤ人排斥は戦後の米国社会からは短期間に姿を消していった。こうした状況変化の下、東欧系ユダヤ人移民の二世・三世は社会的上昇を成し遂げていった。特に学術界におけるユダヤ人の進出には目を見張るものがあった。

学術界での劇的な変化が始まったのは、大学入学者のブームが教授陣の幾何級数的な増加を必要とするようになった、第二次世界大戦直後のことである。1969年までにユダヤ人はアメリカの全大学の教職者の9%を占め、エリート大学の教職者の20%を占めていた。社会学、人類学、心理学、生化学、医学、法律などの分野では、ユダヤ人の比率はさらに高い。(Silberman 1985=1988: 134-135)

アーヴィング・ゴフマンが1944年にトロント大学ユニバーシティ・カレッジ政治経済学部に入学し、1945年秋に米国のシカゴ大学社会学科に入学していった時期は、北米のユダヤ人を取り巻く社会的環境が急速に好転していく時代の幕開けであった。

全てが順風満帆であったわけではないけれども、全体としてみれば、シカゴ大学以降のゴフマンの人生行路は「上昇移動」の過程にあったといえる。1949年秋にエディンバラ大学社会人類学科の助手に就き、同時期に行ったフィールドワークをもとに1953年シカゴ大学から社会学の博士号を取得した。1954年から57年まで米国の国立精神衛生研究所の客員研究員を勤めたのち、1958年にカリフォルニア大学バークレー校の客員教授、1962年には教授になった。1968年ペンシルベニア大学に移り、ベンジャミン・フランクリン講座教授に就任した。最初の著書『日常生活における自己呈示』(Goffman 1959) [以下、『自己呈示』] は、社会学の枠を超えて数多くの読者を獲得したロングセラーになった。その後出版したゴフマンの作品のほとんどが古典的著作となった。私生活では、名門チョート家の令嬢アンジェリカと1952年に結婚

し、翌年一人息子のトムが生まれている。家柄でも彼は「上流階級」の仲間入りをしたといつてよい。

この局面だけをみれば、E・ゴフマンは名声と富を手にした「成功者」であった。Y・ヴァンカンが「ゴフマンの作品は、フロイトの作品と同様に、社会的上昇の自叙伝ではないだろうか」(Winkin 1988: 16)と問題提起したのは、この局面を捉えてのことだろう。しかし、本論考では、ゴフマンの社会的上昇期の前に社会的下降の時期があり、そのときに重大な下降的地位喪失を経験したと推断している。このような推断を前提にした場合、「成功」という《現実》をそのまま受け入れるほど彼が素朴であったとは考えられない。実際に彼の言動として残されているのは、「成功者」という地位が安定したものでない¹と醒めた目で見るゴフマンであった。1960年代に大学院生だったG・T・マークス(Gary T. Marx)が伝えるは、そうしたゴフマンの姿であった。

上昇移動する「我々のような人々」と皮肉交じりに言及したり、大学などのエリート機関で増加しつつある成員のことを、「スティグマを貼られた民族的アイデンティティ」と背景をもった人々が「文明化された」人々であると、ふざけ半分に言及していたことを私は記憶している。彼は、カトリック、ユダヤ人、黒人など劣位に置かれてきた出自の人々が、以前は彼らに門戸が閉ざされていた世界に「侵出していった」のはつい最近の出来事であり、いつ取り消されるかわからない不安定なものであることをよく知っていた。

(……)物事は見かけほど楽観的ではなく、うわべだけの礼儀正しい受け入れはあなたのような種類の人たちに対する本当は醜い態度を覆い隠すものだとということを、彼は聞き手に思い出させて楽しんでいるようだった。(Marx [1984]2000: 67) [傍点は引用者]

「自分は成功者になれる」という「想定(assumption)」が「思い込み(presumption)」でしかなかった(Goffman 1952: 454)と思ひ知る事態をゴフマンがマニトバ大学時代に経験したとすれば、戦後手にした「成功」という《現実》も暫定的なものでしかない²と彼が感じていた可能性は高い。しかも、そうした存在論的感覚が、ユダヤ人が歴史の中で何度も経験してきた民族的記憶に根差すもの³としたなら、E・ゴフマン個人だけでなく、二十世紀前半の北米の東欧系ユダヤ人移民全体に共有されたものであるはずである。彼らは成功して「目立つ」ようになると今度は「不安」が頭をもたげるといふ。

だからアメリカのユダヤ人は、一度は信じたように、自分たちがはたして安全であるかどうかを疑い、

彼らの地位は崩れつつあり、将来アメリカは、近年見せていたほどのよいもてなしをユダヤ人に対してしなくなるのではないかと懸念する。ひっきょう、ユダヤ人が栄え受け入れられる期間と、窮乏と迫害の期間の交替は、ユダヤ人の歴史に反復されてきた主題にほかならない⁴のだから。(Silberman 1985=1988: 5)

「カモ」論文の次の記述は、直接的にはゴフマンの下降的地位喪失体験を指していると読めるが、同時に、ユダヤ民族の歴史的経験を暗示しているとも読める。

〔信用詐欺のなだめ役が〕対象としている人たちとは、期待と自己像(self-conceptions)がいったん築き上げられ、その後粉々に打ち砕かれてしまった人々たちである。(Goffman 1952: 542) [傍点は引用者]

少なくともここでいえるのは、詐欺師による一定の《現実》の構築・維持とその《現実》へのカモの「のめり込み(involverment)」⁵、そしてその《現実》の消失とカモの覚醒という過程ないし構造は、大規模で深刻な方向ではユダヤ人の歴史的経験に適用できる一方、小規模で軽微な方向では「遊びとしての騙し」(Goffman 1974: 87)や「びっくりパーティー」(ibid.: 89)にも適用できる汎用性の高いメタファーだということである。そして、この「現実(リアリティ)」論は「状況の定義」論に引き継がれ、用語は「フレーム(frame)」⁶に取って代わられるけれども、その都度《現実》と見なされるものに「脆弱性(vulnerability)」という本来の特性が備わるとゴフマンが理解している点では一貫している。

のちの論文「ゲームの楽しさ」(Goffman 1961: 15-81)は、「信用詐欺」の前半に当たる過程を詳述した著作だともいえる。すなわち、「ゲーム内世界」という《現実》の構築・維持とそれへの行為者の「のめり込み」の過程ないし構造の詳細な分析ということである。

そして、「信用詐欺」の過程の前半の考察に加えて、詐欺過程の後半で、それまでのめり込んでいた《現実》から覚醒したはずのカモが、別の「さらに大きな信用詐欺」に取り込まれているといった「入れ子」構造を考えていくと、後期の大著『フレーム・アナリシス』(Goffman 1974)に近い理論的骨格が出来上がる。そうしたリアリティの「入れ子」構造的な視点を彼が採用していると思われる記述が「カモ」論文にみられる。

その喪失に責任のない地位喪失者が、のめり込みの対象はどれもさらに大きな信用詐欺の一部を構成しているという秘教的な見方⁷をしていることさえある。というのも、特定の役割に大きな喜びを見出すほど、そ

れから離れるときに大きな苦痛を味わうからである。
(Goffman 1952 : 454) [傍点は引用者]

このように見てみると、「信用詐欺」というメタファーは、ゴフマンが社会学理論を構築していく過程で最初に用いたメタファーにとどまらず、理論構築過程の初期から後期まで彼が一貫して用いた、最も重要なメタファーである可能性が出てくる。筆者は以前の論考で『『信用詐欺』のメタファーとしての射程は広範囲に及んでいる可能性が高い』(薄井 2016 : 9) と示唆したが、この点をさらに積極的に述べている研究者がいる。

ゴフマンが最も長期にわたって用いたメタファーは、彼が最初に用いたメタファー、すなわち信用詐欺である。普通の人たち(カモ)は、それとは知らずに、ゲームに封じ込まれた事前の筋書きを実演することになるが、それは普通でない人々(詐欺師)が行っているゲームである。被害者は誤った想定に基づいてその他人を信じるよう導かれる。(Park 1990 : 271)

もしこの指摘と筆者の予想が正しいとすれば、例えば『自己呈示』に対する見方ないしその読み方に変更が求められる。すなわち、「演出論的(dramaturgical) パースペクティヴ」で一躍有名になった『自己呈示』だが、その叙述内容に最も適合的なメタファーは「劇場のパフォーマンス」ではなく「仕組まれた信用詐欺(a staged confidence game)」(Goffman 1959 : 73) ではないかということである。筆者は以前の論考で、この観点から『自己呈示』の叙述の部分的な読み直しを試みた(薄井 2016 : 9-10)。「信用詐欺」がゴフマンの用いた種々のメタファーの中で特に重要な位置を占めていると確認できる現時点では、「信用詐欺」をルート・メタファーとした『自己呈示』の全面的な読み直しの作業が不可欠だと考える。さらに、ゴフマンの他の著作に対しても、同様の観点から読み直すという課題が浮上する。

かくして、E・ゴフマンの理論展開における「カモ」論文の位置づけ、そしてその原体験となったと目される彼の大学時代の「挫折」体験の実態解明およびその評価の仕方によって、ゴフマン社会学の形成史に対する従来の見方が変わる可能性が出てくることになる。

4. 結びに代えて

以上、二十世紀前半の北米における反ユダヤ主義の動向の中に若きゴフマンの人生行路を置いて、状況証拠と断片的諸事実を推論により関連づけながら、彼の生活誌の「暗黒時代」であるマニトバ大学時代を描き出そうと

試みた。そして、再現された彼の行跡が彼の社会学理論にどのような影響を与えたかについても考察した。

本論考で提出した、北米の反ユダヤ主義によるマニトバ大学時代のゴフマンの「挫折」というストーリーは、いまだ「仮説」であって、「説」として受け入れられるほど裏付けは揃っていない。しかし、ウクライナ出身のユダヤ人移民の子アーヴィング・ゴフマンが過ごした第一次大戦後から第二次大戦末までのカナダでの生活という「背景」を描くと、断片的な彼の行跡がその「絵」の中に整合的に収まっていくことも事実である。

トロント大学以降の若きゴフマンの知的生活誌を詳細に解明した Y・ヴァンカンが「東欧系ユダヤ人カナダ移民二世としてのゴフマン」の生活誌を描き出せなかった最大の原因は、マニトバ大学時代までのゴフマンのパーソナルな情報の欠如にあった。この面で新たな事実の発掘がなされつつあるとはいえ(Shalin 2014 ; Cavan 2014)、NFB 勤務以前のゴフマンに関する個人的情報の決定的な不足という状況はあまり改善しそうもない。

学史研究上不利なこの状況を打開するには、彼の生活誌上の事実を発掘するという正攻法以外のアプローチも必要になる。E・ゴフマン個人の情報は乏しいけれども、同時代のユダヤ人北米移民に関する研究は蓄積されており、東欧系ユダヤ人移民二世・三世の自伝的な著作も少なくない。直接的な情報はわずかだが、関連情報は比較的豊富なのである。だとすれば、そうした関連情報を最大限に活用すべきであろう。本論考は、この考えに基づいた解明の試みである。最善の情報がないからといって「問題」を放置するよりは、次善の情報に基づく推測によってでも「問題」に挑んでいったほうがよい。

「東欧系ユダヤ人カナダ移民二世という出自がゴフマン社会学に対してもつ意味」という問題。この解明には困難が予想され、時間も要すると思う。それでも、筆者がなぜこの問題にこだわるかという、ゴフマン自身による次の発言が伝えられているからである。

「ユダヤ人であること、しかもロシアのユダヤ人であるということは、私[E・ゴフマン—引用者]について多くを説明する」(Burn 1992 : 9)

伝えられているのはこの発言のみなので、ここから彼の「真意」を推し量ることはできない。だが、筆者は、この発言を文字通りの意味で受けとめようと思う。述べたときの口調や表情によって陳述のメタ・メッセージは変わるけれども、ゴフマンがこの発言を通して東欧系ユダヤ人カナダ移民二世である彼の身の上に起こった「何か」について伝えようとしていたのは間違いない。その「何か」の存在を想定しなければ、例えば、フィールド

ワークや調査に基づかない作品『スティグマ』を彼がなぜ著したのかという問いに納得できる答えを出すことはできないだろう。「ユダヤ人」問題が加わることによって「ゴフマン社会学の謎」を読み解く作業は一時的に錯綜するようにみえるが、しばらくしたそののちには、複雑ではあるが一貫したゴフマン社会学像が現われてくるだろう、というのが筆者の見通しである。

〔注〕

- (1) 米国では1924年に「新移民法」が制定されたため東欧系ユダヤ人移民の流れはそれ以後ほとんどなくなるが、カナダは人道的な見地から20年代も受け入れ、1920～30年に5万人弱のユダヤ人の入国を認めた (Knowles 2007=2014: 180)。
- (2) ポグロム (pogrom) はユダヤ人への民衆の集団的な破壊・暴力・殺害行為を指す。十字軍以降、欧州各地で発生した。ロシアの大規模なポグロムとして、アレクサンドル二世暗殺事件 (1881年) にユダヤ人女性に関与したことから南ウクライナ地方を中心にユダヤ人商店・家屋の破壊が約200の町村で発生した「第一次ポグロム」がある。ロシア第一革命に関連して起こった「第二次ポグロム」では、1903年キシニョフでユダヤ人45人が殺害され、約1,500のユダヤ人商店・家屋が破壊されたのを皮切りに、1905～06年に約660件のポグロムが発生し、3,000人以上のユダヤ人が殺害された (黒川 1997: 203-209)。
- (3) イーディッシュ語 (Yiddish) は、高地独語方言を基礎にヘブライ語・スラブ語が混和し成立した言語で、ヘブライ文字で右から左へ表記する。独語に似たイーディッシュ語の単語をゴフマンが口にしていたとの情報がある (Winkin 2010: 54)。この点は、G・ジンメルに加え、N・エリアス (Norbert Elias) の *Über den Prozess der Zivilisation* (1939年) の影響という論点にも関係する。
- (4) R・K・マートンは1910年生まれの東欧系ユダヤ人移民二世で、本名はメイヤー・ロバート・シュコルニク (Meyer Robert Schkolnick) であった。1930年代に姓名変更したらしい。彼の生活誌と理論に関しては (佐藤 2011) を参照のこと。医師志望だったJ・アクセルロッドは、1933年にニューヨーク市立大学シティカレッジで生物学の学士号を取得後、複数のメディカル・スクールを受験したが、どこも不合格となった。その後実験助手を経て、1935年からニューヨーク市衛生局でビタミン研究を行い、1970年にノーベル生理学・医学賞

を受賞した。D・ベルは当時ユダヤ人移民子弟が集中していたニューヨーク市立大学を1938年に卒業後、約20年間ジャーナリストとして活動した。1940年代後半にシカゴ大学で講師を務め、1960年にコロンビア大学から博士号を取得して同大で約10年間社会学を教えたのち、ハーバード大学に移った。H・ガーフィンケルも東欧系ユダヤ人移民の子である。彼の父は家具卸業者であり、彼は最初ニューヨーク大学で「会計学」の学士を取得した。1965年にノーベル物理学賞を受賞した R・P・ファインマンは、高校まで化学と数学の成績が優秀だったのでコロンビア大学を受験したが、おそらくクオータ・システムのため入学を拒否され、MITに進学した。

- (5) 戦前の北米における大学入学者選抜のクオータ・システムは、従来の米国の学生文化とは異質な気風をもつ東欧系ユダヤ人の入学者急増に対し、彼らの入学を制限しようと大学当局が非公式に実施した措置である。ユダヤ人か否かを判別するため、入学志願票には「志願者自身と父親の姓、母親の結婚前の姓、改姓歴がある場合は改姓前の姓、キリスト教会の会員か否か、家庭内で日常的に話されている言語、両親の出身地、父親の職業」 (佐藤 2000: 160) の記入が求められた。ユダヤ人を排除するためにコロンビア大学で導入された「心理テスト」は、WASPの中産階級以上の家庭でなければ答えられない内容だった。
- (6) カナダは広大なプレーリーを開拓していく必要上、移民を米国以上に積極的に受け入れてきた。カナダの広大な国土に比して移民数は米国の10分の1以下であったこともあって、1920年代以降も移民の受け入れを継続していた。
- (7) 「Averbach/Averback Family Reunion Album」 (URL: cdclv.unlv.edu/ega/documents/averbakh.pdf) [2018年9月17日閲覧]
- (8) 筆者は以前、マニトバ大学における「化学」から「哲学」等への専攻変更に関して、高校時代に大学3年の知識をもっていたゴフマンには大学の「化学」の勉強が物足りないものであったことが原因であったのではないかと推測した (薄井 2017: 46)。しかし現時点では、この推測は的外れであったと考えている。
- (9) 解釈 d) を前提にした場合、解釈 c) も両立し得る。すなわち、「化学の研究者」の途を諦めざるを得なくなり「自暴自棄」の行為として「哲学」等のコースを履修した可能性もあるということである。
- (10) 《現実》と〈現実〉の表記に関して。《現実》は詐

欺師に騙されカモが信じ込んでいる現実 A の位相を表し、〈現実〉は騙されていたことに気づいたカモに現出する現実 B の位相を表す。箱の中の箱という含意で二重の山括弧《 》を、箱の外という含意で一重の山括弧〈 〉を用いる。ただし、両者の関係は相対的である。覚醒したと思った人に現われる〈現実〉が別の「騙し」の《現実》ということもあり得る。

- (11) 無理な解釈と思われるかもしれないが、なぜゴフマンがこの文章を引用しようと思ったかまで考えると、あり得なくはない。一般に、「共感」しない体験談を引用したりはしないだろうから。
- (12) 1940年マニトバ大学は20歳以上の男子学生全員に軍事訓練を義務づけた (Bumsted 2001)。ゴフマンが大学を退学した1942年は、軍事訓練が課せられる年齢に彼が達する年である。これがゴフマンの大学中退の理由だった可能性もある。彼が大学を退学したことには変わりはないが、ストーリーが若干変わる。ただし、ロングの証言にあるように、大学中退を選ぶほどゴフマンが軍事訓練を嫌った背景に反ユダヤ主義の存在があったので、反ユダヤ主義によりゴフマンが大学を中退したという基本的なストーリーは維持される。
- (13) 「私の両親はユダヤ教だったけれど、私は宗教は何ももっていない」(栗原 1982 : 297) というゴフマンの発言から彼がユダヤ教を捨てたことは確かだが、それがいつのことか従来不詳であった。
- (14) ゴフマンの大学中退の理由が徴兵を嫌ったからであれ、化学の研究者の途が閉ざされていたからであれ、背景に反ユダヤ主義の存在があった点は共通している。
- (15) ゴフマンと E・ボットの恋人関係は1946年に終わったという (Winkin & Leeds-Hurwitz 2013 : 16)。「カモ」論文では、「インフォーマルな交際において人をなだめるという問題は、たぶん、求愛・求婚の状況およびいわば求愛・求婚を断る状況において最も明瞭に見られる」(Goffman 1952 : 456)、「恋人が友人になるよう求められるかもしれない」(ibid. : 457) など、恋人関係や婚約の解消を取り上げた記述がみられる。
- (16) 論理的に言えば、これは一種の循環論法ないし論点先取、すなわち「ゴフマンの生活誌が彼の作品に反映している」はずだから「彼の作品から彼の生活誌上の事実を類推できる」はずであるという論法である。しかし、このような想定からいくつかの「発見」があることも否定できない。
- (17) 晩年ゴフマンは「私が書いた最初の二、三の論文

はよく考えないで即座に書いたようなものです」(Verhoeven [1993]2000 : 216) と述べているが、それは調査プロジェクトなしで指導教授の許可も得ずに書いたことへの自嘲的表現と思われる。「カモ」論文はのちに別の論文集 (Rose 1962) に収録された。適当に書いた論文を別の本に再録などしないだろうから、彼がこの論文に思い入れがあったのは確かだと思う。

- (18) ガーフィンケルは初期の論文 (Garfinkel 1956) で「自然なメタファー (natural metaphor)」の適用例として「カモ」論文について誌面を割いている。
- (19) 同郷出身のユダヤ人メンドロヴィッツが「カモ」論文を高く評価し、ゴフマンの論文執筆に際して示唆を与えた点を考えると、この論文が「ユダヤ人」の経験と関連していた可能性がある。

【文献】

- Albas, D., 2012, "At the Convocation Goffman Said, "One Is Born Near a Granary and Spends the Rest of His Life Suppressing It", " (URL : http://digitalscholarship.nlv.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1001&context=goffman_archives) [2018年 7月12日閲覧] .
- Bay, Frances E., 2009, "At His Bar Mitzvah Erving Gave a Little Speech That He Wrote Himself and That He Called "Ode to Mother", " (URL : http://cdclv.unlv.edu/archives/interactionism/goffman/goffman_bay_09.html) [2018年 8月22日閲覧]
- Besbris, Esther, 2010, "When Erving Was an Infant My Mother Nursed Us Both So We Were Bosom Buddies," (URL : http://cdclv.unlv.edu/archives/interactionism/goffman/besbris_09.html) [2018年 8月 9 日閲覧]
- Bumsted, J. M., 2001, *The University of Manitoba : An Illustrated History*, University of Manitoba Press.
- Burns, Tom, 1992, *Erving Goffman*, Routledge.
- Cavan, Sherri, 2014, "When Erving Goffman Was a Boy : The Formative Years of a Sociological Giant," *Symbolic Interaction* 37(1) : 41-70.
- Collins, Randall, 1986, "The Passing of Intellectual Generations: Reflections on the Death of Erving Goffman," *Sociological Theory* 4, 1 : 106-113.
- Dinnerstein, Leonard, 1994, *Anti-Semitism in America*, Oxford University Press.
- Garfinkel, Harold, 1956, "Some Sociological Concepts and Methods for Psychiatrists," *Psychiatric Research Reports*, 6 : 181-198.
- Goffman, Erving, 1951, "Symbols of Class Status," *The*

- British Journal of Sociology* 2, 4 : 294-304
- , 1952, “On Cooling the Mark Out : Some Aspects of Adaptation to Failure,” *Psychiatry : Journal for the Study of Interpersonal Processes* 18, 3 : 213-31.
- , 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday Anchor.
- , 1961, *Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction*, The Bobbs-Merrill Company, Inc.
- , 1963, *Stigma : Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc.
- , 1974, *Frame Analysis : An Essay on Organization of Experience*, Harper & Row.
- Knowles, Valerie, 2007, *Strangers at Our Gates : Canadian Immigration and Immigration Policy, 1540-2006*, Dundurn Press Limited. (=2014, 細川道久 訳『カナダ移民史—多民族社会の形成—』, 明石書店.)
- 栗原 彬, 1982, 『管理社会と民衆理性』, 新曜社.
- 黒川知文, 1997, 『ユダヤ人迫害史—繁栄と迫害のメシア運動—』, 教文館.
- Marx, Gary T., [1984]2000, “Role Model and Role Distance : A Remembrance of Erving Goffman,” in G. Fine & G. Smith (eds.) *Erving Goffman* [1], Sage.
- Mendlovitz, Saul, 2009, “Erving Was a Jew Acting Like a Canadian Acting Like a Britisher,” in Dmitri N. Shalin (ed.), *Bios Sociologicus : The Erving Goffman Archives* (URL:http://digitalscholarship.unlv.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1048&context=goffman_archives) [2018年 8 月26日閲覧]
- Park, George, 1990, “Making sense of religion by direct observation : An application of frame analysis,” in Stephen H. Roggins (ed.) *Beyond Goffman : Studies on Communication, Institution, and Social Interaction*, Mouton de Gruyter.
- Rose, Arnold M. (ed.), 1962, *Human Behavior and Social Processes : An Interactionist Approach*, Routledge & Kegan Paul.
- 佐藤唯行, 2000, 『アメリカのユダヤ人迫害史』, 集英社.
- 佐藤俊樹, 2011, 『社会学の方法—その歴史と構造』, ミネルヴァ書房.
- Shalin, Dmitri N., 2014, “Interfacing Biography, Theory and History : The Case of Erving Goffman,” *Symbolic Interaction* 37(1) : 2 -40.
- Silberman, Charles E., 1985, *A Certain People : American Jews and Their Lives Today*, Summit Book. (=1988, 武田尚子 訳『アメリカのユダヤ人 : ある民族の肖像』, サイマル出版会.)
- Smith, Gregory W. H., 1989, “A Simmelian Reading of Goffman,” unpublished Ph. D. dissertation, Department of Sociology and Anthropology, University of Sanford. (URL : <http://usir.salford.ac.uk/14705/1/D092734.pdf>) [2018年 8 月20日閲覧]
- , 2006, *Erving Goffman*, Routledge.
- Stember, Charles H., et al., 1966, *Jews in the Mind of America*, Basic Books, Inc.
- Syme, S. Leonard, 2011, *Memoir of A Useless Boy*, Vlibris Corporation.
- Tulchinsky, Gerald, 2008, *Canada's Jews : A People's Journey*, University of Toronto Press.
- 薄井 明, 2012, 「社会階級論の磁場の中のゴフマン社会学—彼の最初の公刊論文(1951)をめぐって—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 第19号.
- , 2016, 「羽化したばかりのゴフマン社会学—第二公刊論文(1952)に関する一考察—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 第23号.
- , 2017, 「若きゴフマンの知的生活誌—高等学校時代と大学時代—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』 第24号.
- Verhoeven, Jef C., [1993]2000, “An Interview with Erving Goffman, 1980,” in G. Fine & G. Smith (eds.) *Erving Goffman* [1], Sage.
- Winkin, Y., 1988, *Les Moments et Leurs Hommes*, Seuil/Minuit.
- , 2010, “Goffman's Greenings,” in M. H. Jacobsen (ed.) *The Contemporary Goffman*, Routledge.
- Winkin, Y. & Leeds-Hurwitz, W., 2013, *Erving Goffman : A Critical Introduction to Media and Communication Theory*, Peter Lang Publishing, Inc.
- Wrong, D., 2011, “Bobby Adamson Said, “Pooky Is a Genius, and as Soon as He Starts Writing His Own Stuff It Will Be Recognized,” (URL : http://cdclv.unlv.edu/archives/interactionism/gooffman/wrong_10.html) [2018年 7 月22日閲覧] .

Why Didn't Erving Goffman Continue Studying Chemistry : A Hypothesis about the Influence of Anti-Semitism in North America upon E. Goffman's Life-Course and His Sociology

Akira USUI*

Abstract : Erving Goffman was a science student at St. John's Technical High School and he was a chemistry major during his first two years of the University of Manitoba, but he suddenly switched his major from chemistry to philosophy, psychology and sociology at his third year. Why didn't Erving continue studying chemistry at the university although he was called a "natural science genius" and was said to be as advanced as a college graduate in chemistry at his high school? My answer is that the change of his major was a result of giving up his future career in research because careers in chemical research were closed off to Jewish people at that time. The writer presumes that the anti-Semitism in North America in the first half of the twentieth century ruined Erving's dream of being a chemist. One year after taking another course, he left the university and worked at an ammunition's company in Winnipeg, and the following year he moved to Toronto to work for the National Film Board of Canada. My understanding is that E. Goffman sublimated this dropout experience into his second published essay, "On Cooling the Mark Out," about a decade later and he developed his theory on reality which was mainly based on his experience.

Key Words : Erving Goffman, anti-Semitism, St. John's Technical High School, University of Manitoba, "On Cooling the Mark Out"

* Center for Development in Higher Education